

平成29年度第1回ハタハタ資源対策協議会資料

表1 秋田県における漁獲枠と漁獲実績の推移

単位:トン

年	沖合			沿岸			合計		
	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)	漁獲枠	漁獲量	実績(%)
平成 7年	85	54	63	85	89	104	170	143	84
8年	110	86	78	110	157	143	220	243	111
9年	180	148	82	180	280	155	360	428	119
10年	300	162	54	300	438	146	600	599	100
11年	400	142	36	600	580	97	1,000	722	72
12年	400	265	66	600	902	150	1,000	1,166	117
13年	520	506	97	780	986	126	1,300	1,493	115
14年	680	384	57	1,020	1,570	154	1,700	1,954	115
15年	960	907	94	1,440	2,051	142	2,400	2,958	123
16年	1,000	707	71	1,500	2,349	157	2,500	3,055	122
17年	1,000	489	49	1,500	1,867	124	2,500	2,356	94
18年	800	944	118	1,200	1,640	137	2,000	2,584	129
19年	720	847	118	1,080	765	71	1,800	1,612	90
20年	1,200	868	72	1,800	2,035	113	3,000	2,903	97
21年	1,040	1,054	101	1,560	1,475	95	2,600	2,530	97
22年	960	457	48	1,440	1,277	89	2,400	1,734	72
23年	1,120	677	60	1,680	1,287	77	2,800	1,964	70
24年	1,080	376	35	1,620	931	57	2,700	1,307	48
25年	768	624	81	1,152	898	78	1,920	1,522	79
26年	672	285	42	1,008	940	93	1,680	1,225	73
27年	320	438	137	480	686	143	800	1,124	141
28年	320	450	141	480	393	82	800	844	105

※ 平成9年以降は、沖合は管理漁期(9月～翌6月)、沿岸は漁期(11月～翌1月)の合計値（水産漁港課調べ）

◎H28年の配分枠に対する実績は、沖合 141 %、沿岸 82 %、全体で 105 %であった。

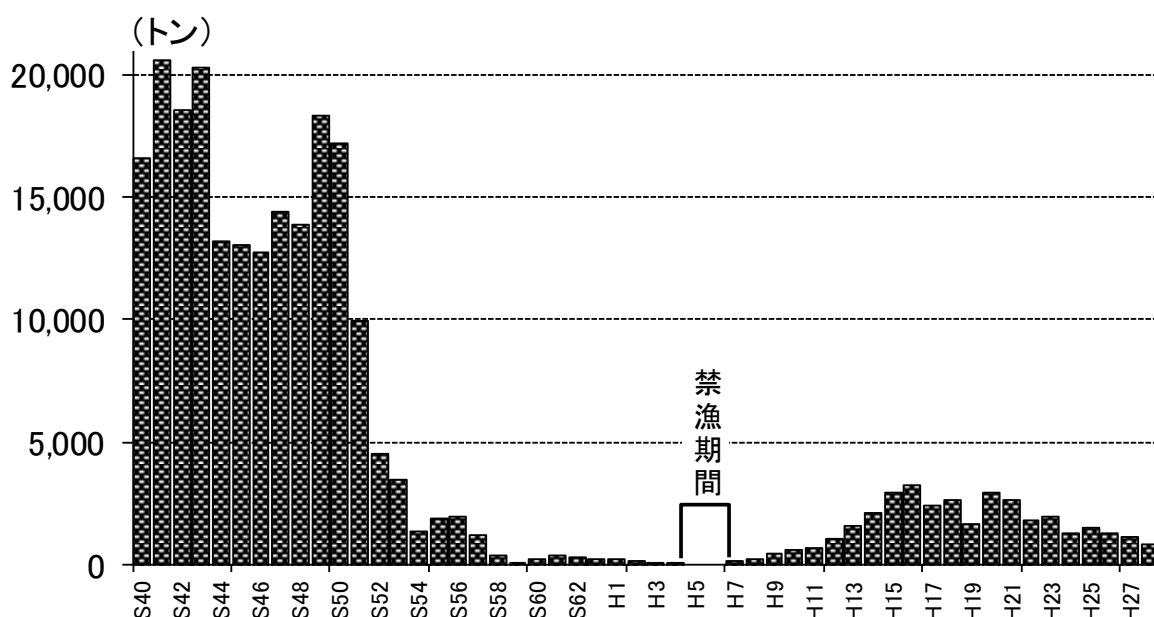


図1 秋田県におけるハタハタ漁獲量の推移

(1～12月漁獲量: H27年までは農林水産統計、H28年は水産漁港課調べ)

◎H28年1～12月の本県漁獲量は 817トンで、前年に比べて 332トン減少した。

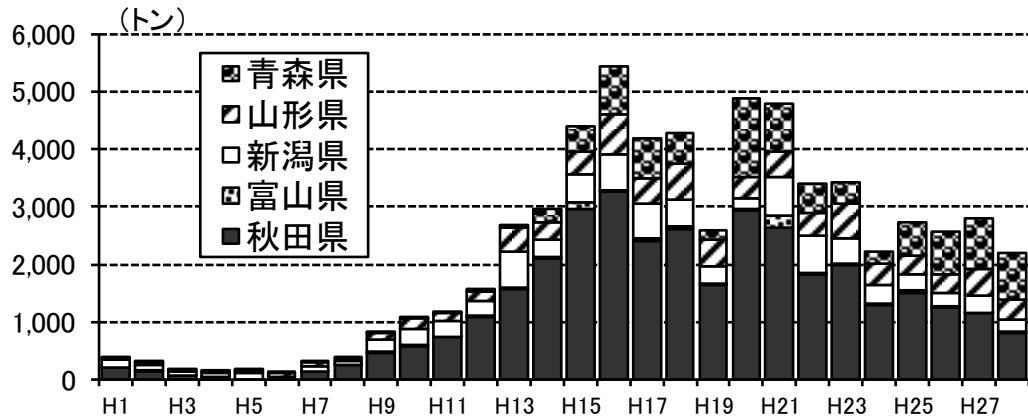


図2 日本海北部5県における漁獲量の推移 (H28年は日本海区水産研究所調べ)

- ◎H28年の5県漁獲量は2,207トンで、前年より559トン減少した。
- ◎このうち秋田県の割合は37%で、前年に比べ5ポイント低下した。
- ◎県別では秋田817トン(前年比71%)、青森819トン(同92%)、山形339トン(同72%)、新潟224トン(同77%)、富山8トン(同56%)で、日本海北部系群を漁獲する各県とも減少した。

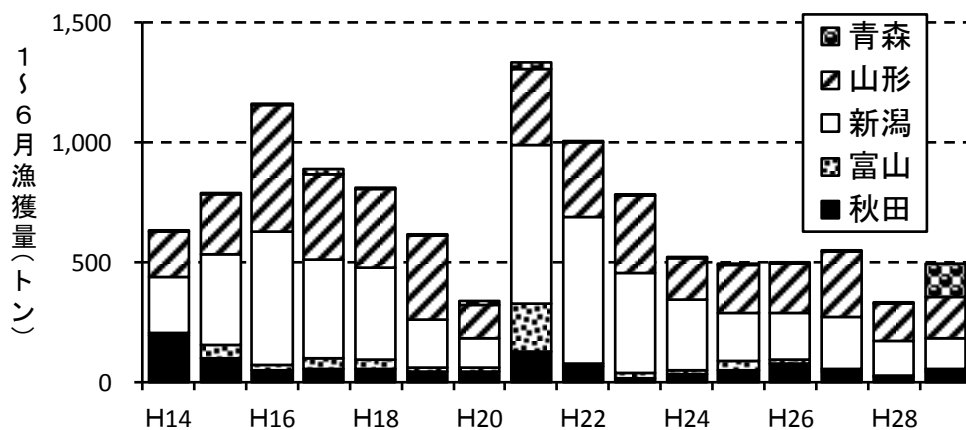


図3 1～6月における日本海北部5県のハタハタ漁獲量

(H28年まで日本海区水産研究所調べ、H29年は水産振興センター調べ)

- ◎本年1～6月の日本海北部5県の漁獲量は496トンで、前年の149%であった。
- 各県の漁獲量は、秋田47トン(前年比227%)、青森139トン(同3,832%)、山形173トン(同110%)、新潟129トン(同88%)、富山9トン(同180%)で、新潟を除き前年を上回った。
- ◎青森県や秋田県北部海域では1～3月に例年より多く漁獲された。このことから、産卵期(11～12月)の漁場が北偏傾向にあると推察された。

●底びき網での調査結果（成魚：11－12月）

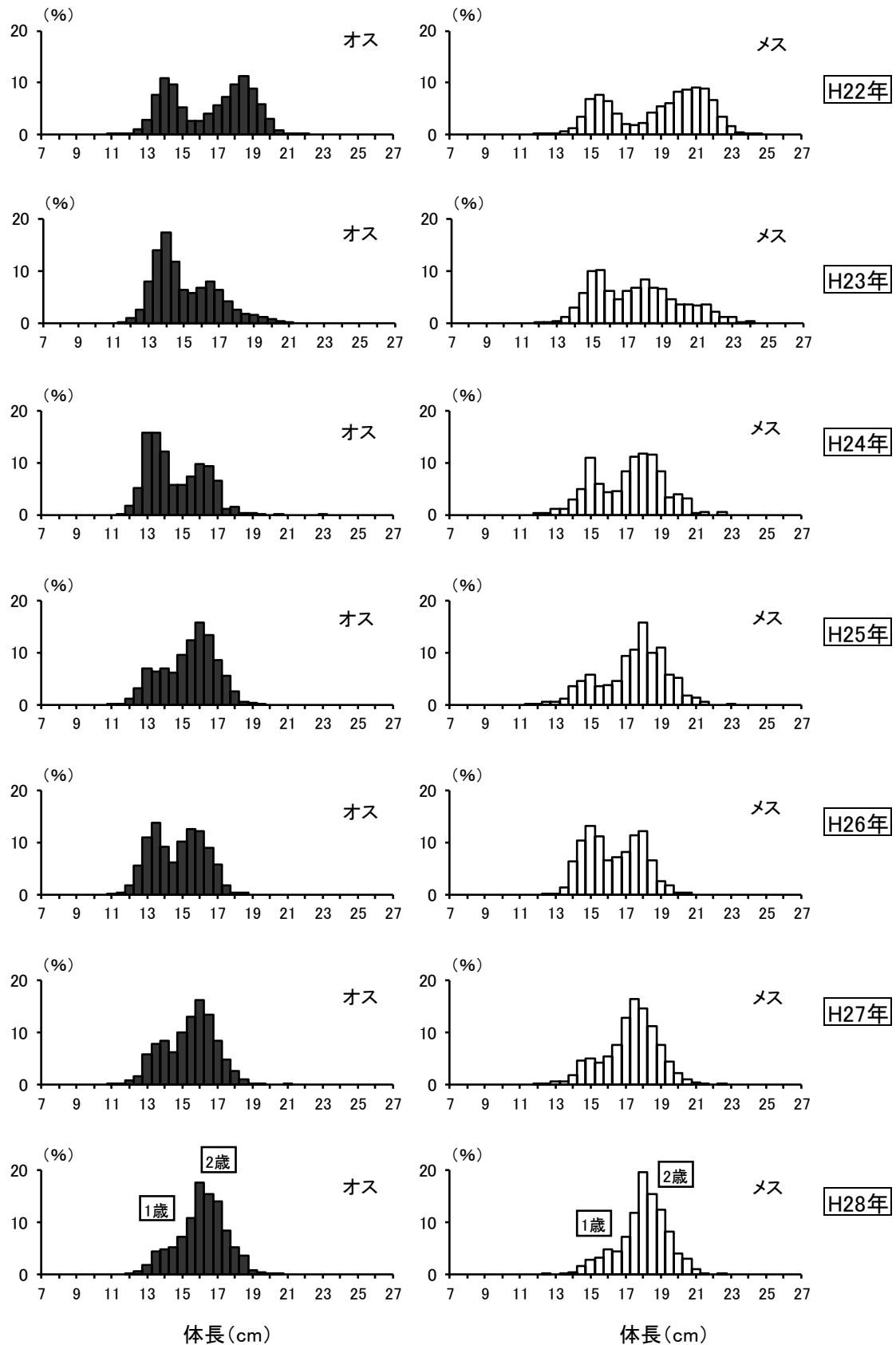


図4 11、12月におけるハタハタ体長組成(H22-28)

【昨年の傾向】

◎漁獲の中心はH26年生まれ(2歳)であったが、漁獲量は低調であった。

◎H27年生まれ(1歳)も近年ではかなり少なかった。

→今漁期の2、3歳魚の大幅な漁獲量増加は期待できない。

●底びき網での調査結果（4－5月）

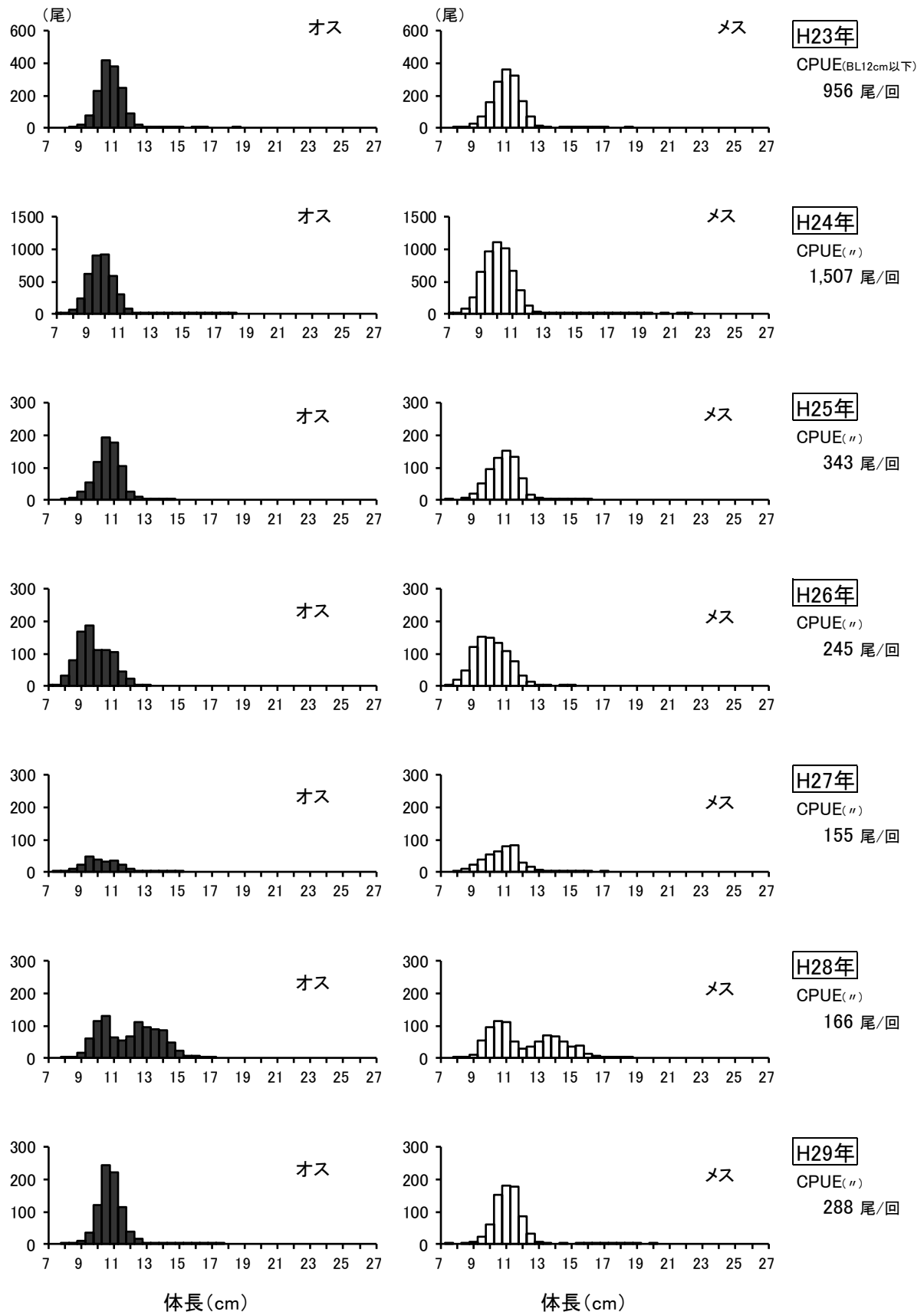


図5 4、5月におけるハタハタ体長組成（H23-29; 水深250m以浅）

【今年の傾向】

◎今期漁獲される1歳魚の資源量の参考となる4、5月の分布量は、昨年よりも多かった。
→今期の1歳魚の来遊数は昨年よりも多いと推察される。

●調査船での調査結果（成魚：9－10月）

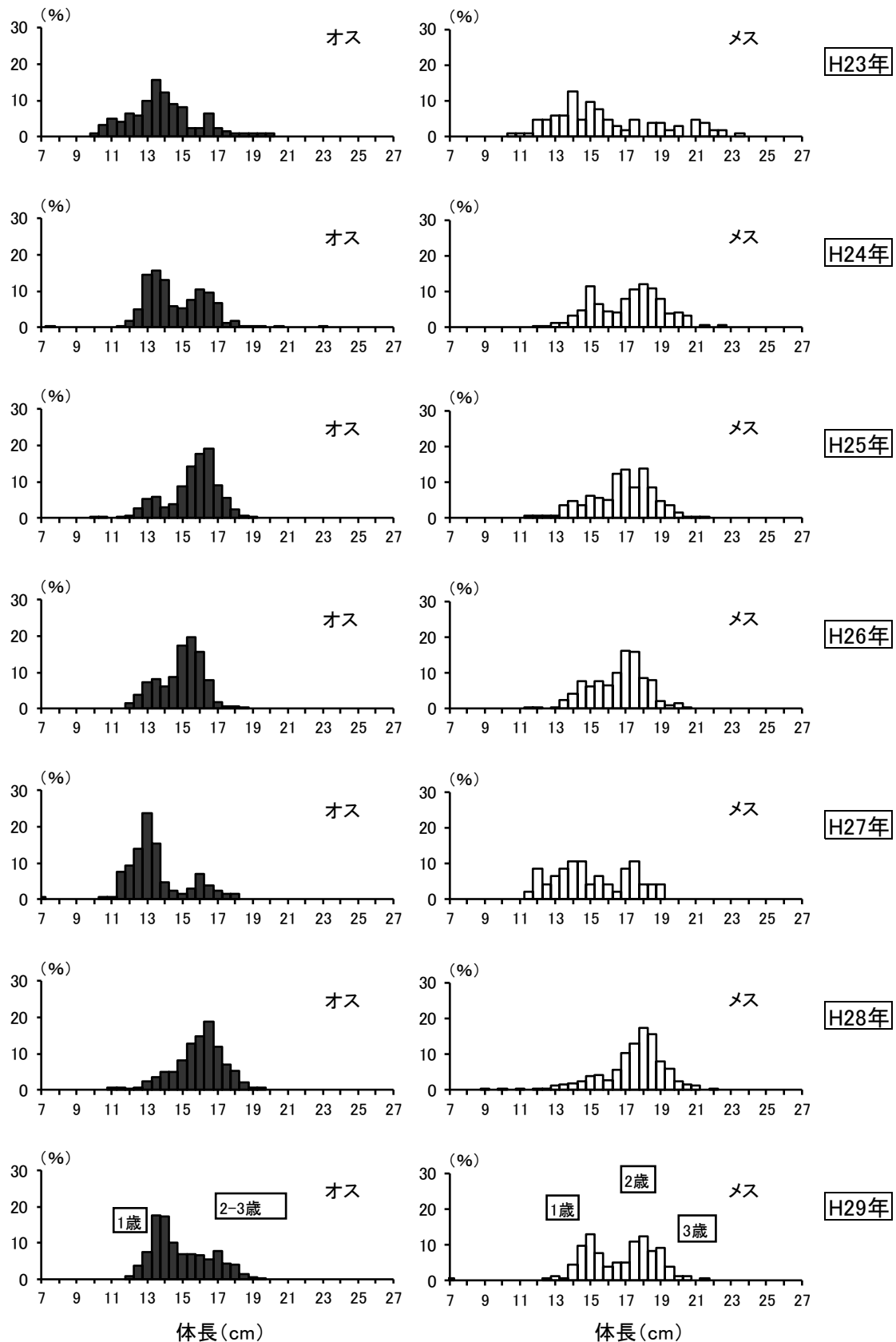


図6 9、10月におけるハタハタ体長組成(H23-29)

（H23年まで第五代千秋丸、H24年は用船調査、H25年以降は第六代千秋丸+民間船データ）

【今年の傾向】

- ◎オスは1歳（H28生まれ）が主体で、2－3歳（H26、27生まれ）の割合も約半数を占めた。
- ◎メスは1－2歳が主体であった。

H29年漁期のハタハタ漁獲対象資源

解析の結果、秋田県の漁獲対象資源の尾数は3,200万尾、重量は約1,800トと推定した。

- ・ 今漁期の魚体は1－2歳魚（小・中型）が中心で3歳魚（大型）も混じる。
- ・ 昨年漁期よりも1歳魚の資源尾数は多いことが期待できるが、2歳魚はかなり少ない可能性がある。
- ・ 昨漁期と同様に今漁期も漁場の偏りが大きい可能性が高い。

〔提案〕

- ◎操業中に各船で漁獲情報を共有し、価格の暴落を避ける操業に努める（沖合漁）
- ◎漁獲量が減少する漁期後半の操業を止め、操業期間を短縮（沿岸漁）
- ◎漁獲物を漁協に集約して鮮魚、加工向けに出荷し、少ない漁獲量でも収入確保
→加工向け原材料を確保することで、ハタハタ加工品の安定生産に貢献
- ◎小型魚の混獲を低減する漁具の導入

操業に要する労力やコストを削減して経営の向上を図るとともに、小型魚の獲り残しを増やすことでハタハタ資源を維持し、来年以降の漁獲を確保することが重要。